

• 0 1 2 3 4 5 6 7

20

JAPAN

10

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

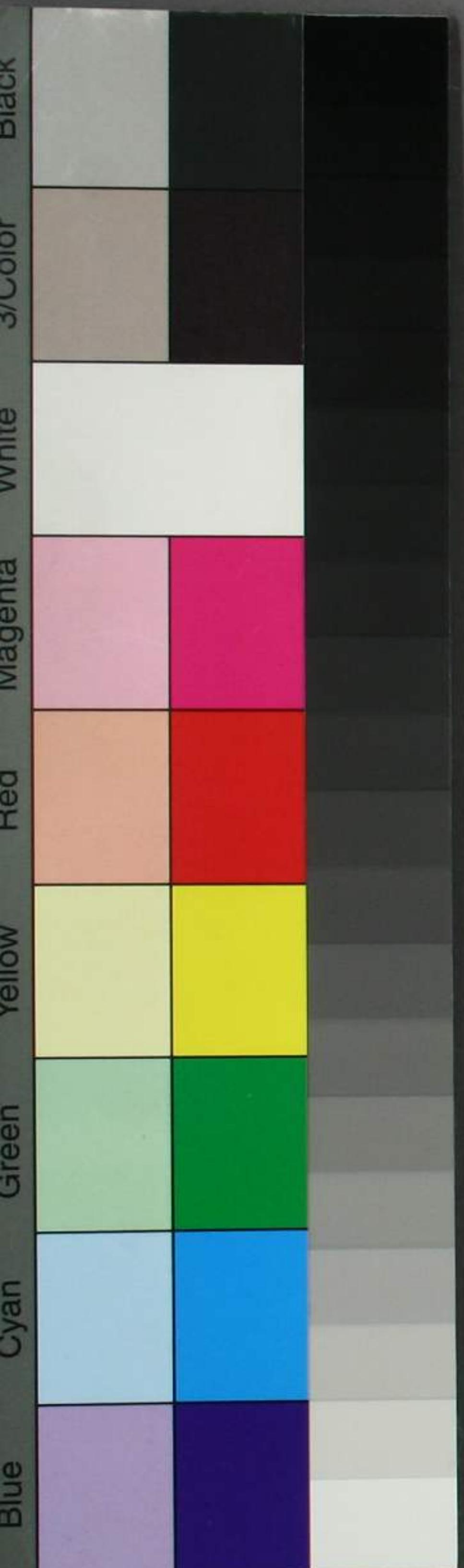
ル 4

4704

2

戸花曆

貳



門號 4704
卷 2

大
鎮

固
鑒

書
序

○ ○ ○ ○ ○
藤 花
納 合 牡丹
涼 歌 花
歡 花

夏之部目次

○ ○ ○ ○ ○
蘆 蘭 櫻 蘭 踵
夏 越 橋 越 趵

○ ○ ○ ○
蓮 花 水 雞
杜 若 郭 公

早稻田大学圖書館
昭和36.10.4
藏書

大槻

江戸遊覽花曆卷之二

江戸

岡山鳥

編輯

○藤

葛原よりくきりもにゆるかとまのすまよどとだれと丁度の

亀戸天満宮池辺

表門を入て正面一ノ又橋の北よ出流と云

瀬々た右孫搬あさのちよ茶店を搖ひひそく

裏門のうち連教堂より連教堂右を末社頃宮神の社の

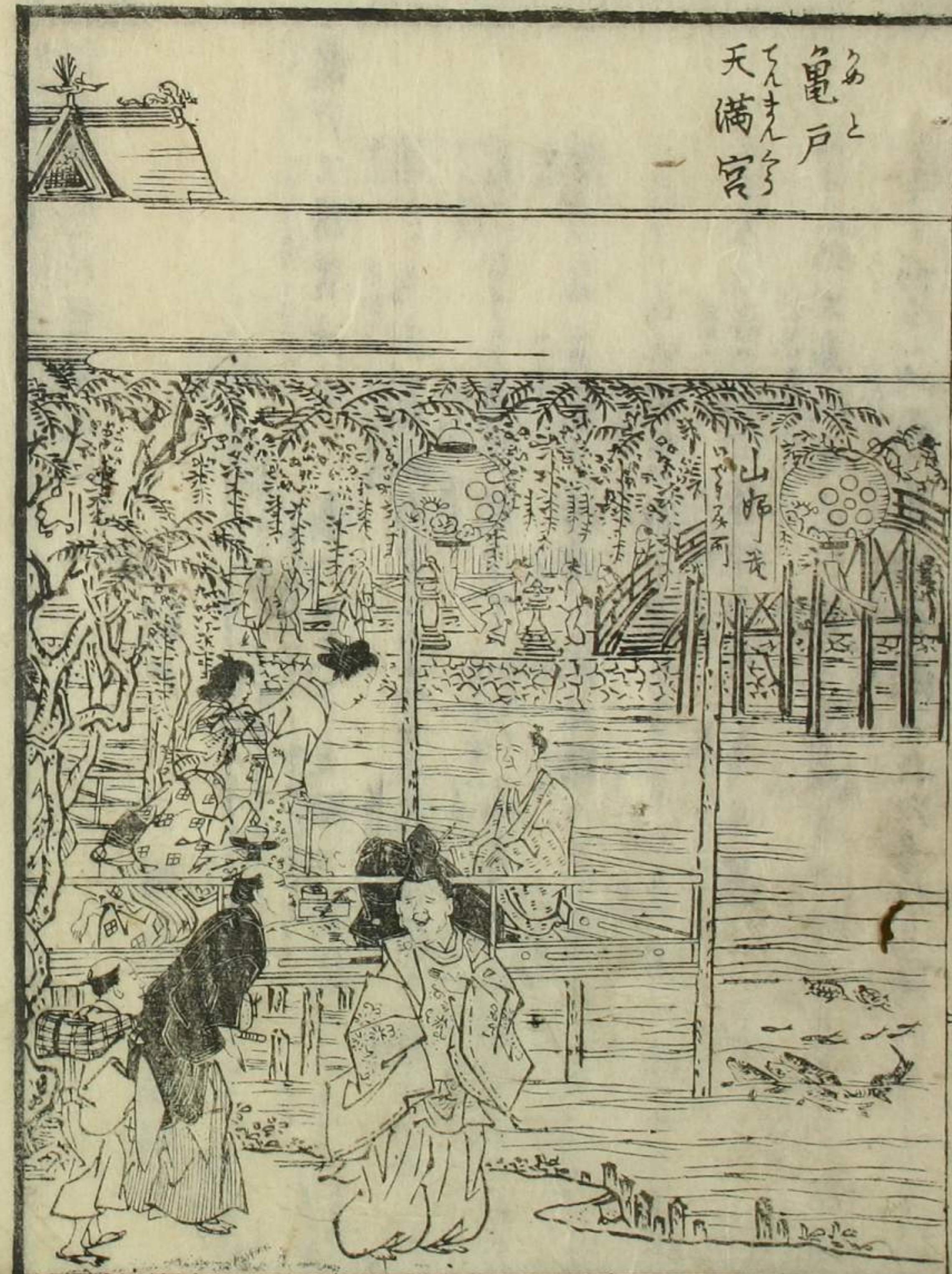
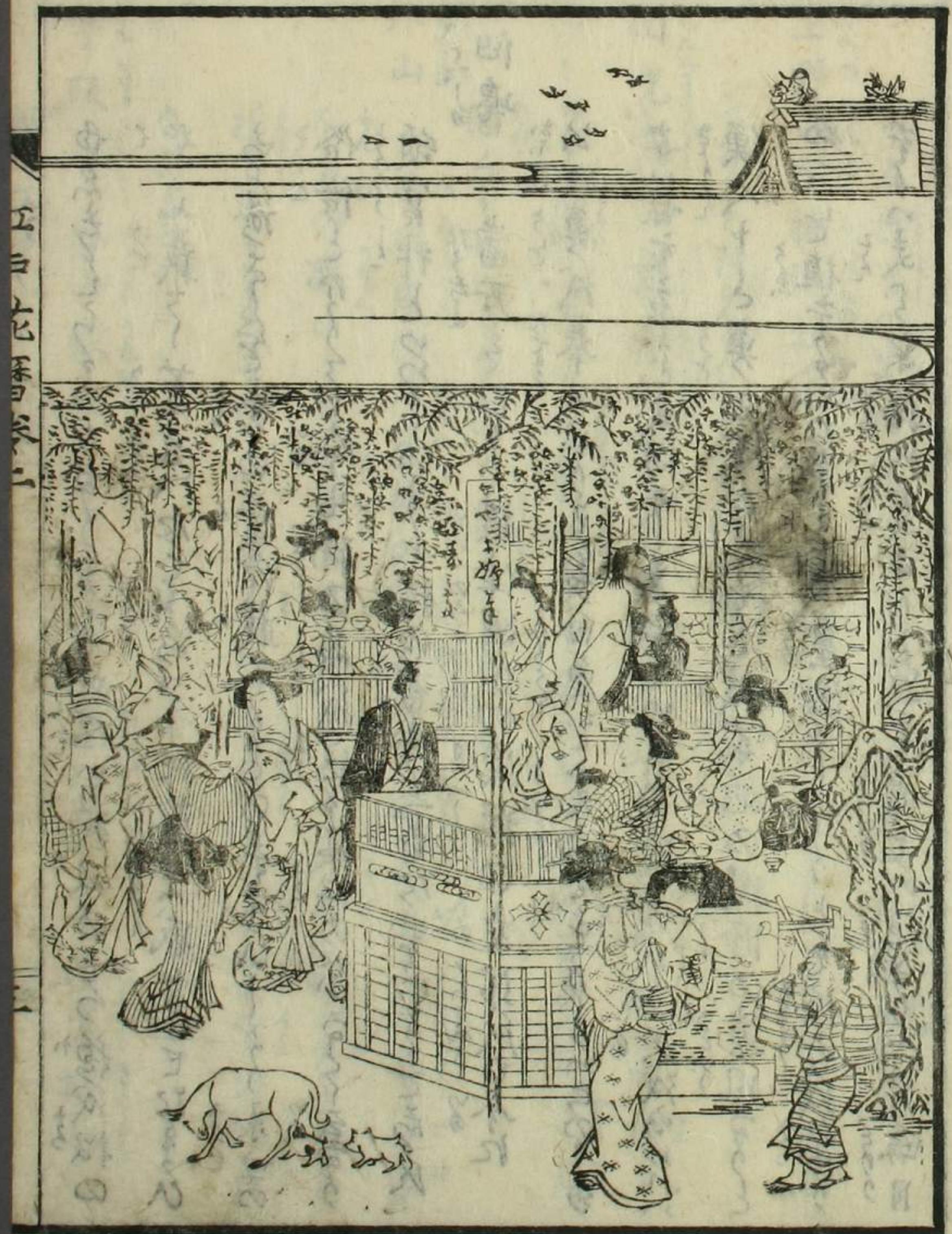
隙やうゆ真壁の圓の池み縁りて紫竹が伏流せる

ウエーハの頃宮神とりよそ老人夫婦の像せりその

うち青赤の鬼秋立にり各本像に彩色をひと

さんの大鬼秋老夫と傳りたる神なり社前より伝記

してり此爺莫相巫流さればも時後らあひ



おまえもくらうやうりやうと此處へ鞍坂のもう藪代松の
葉ふ載て蔓公へたてようまに蔓公感せむをなまひ
あはれうとまの葉に載らることをまひしようまの
俗語とかく今も柳の葉代送ふみ松の葉をくわす
頃官神とりのものより化の書小豆てうそのまとあらん
佃鳴　當所をむけ提津岡佃の漁翁の者御歴を今に
公に勇へ奉るうりよ多白魚を定よとそりくらうのを
安藤を家を度ほせまことのめ安藤をかう米代ありハ
漢人よと勇とまわらそと彼家抱の漁師の遺風すと
ゆうと植まらねを度墓あうとそと便吉代あり
さうの支山家後が度すりとらそと篠との経うり六月晦日

大槻

兵庫州

すき住吉の荒和紙にあづくねうて秦諸多一
えのえのりんのしゃら
上野山王権現社代　いめくのまくわく
いめくにだくくにうに一樣を存せり
田光寺　東叡山のう一地根草みあつ庭中袖せ間金子
くを綴てきり蓋の比くもとのひとみ床札をそておも
酒くもかくもとと身うちある
外山　尾別侯の屋敷の役大久保通くと身通筋はる家
人氣の構のうち大本のりまれあう此あにやまくらう
模くもよどくろりうるうるアリ一ノ年うと紫雲の拂引
芋坂　谷中感應寺う通つ本村のうち根岸坂をく
くらう

中通（ちゅうどく）小酒店ありの御通（ごどく）より

傳明寺

傳通院前をまかせん所の左のやぐらさま

坂（さか）をまかせん所の右のやぐらさま

蘿横町

小石川白山神社跡大通り桜井氏より昔

一の巻橋の下故に里俗名根横町といふ今の方は

さるが森の跡とす

鈴ヶ處八幡宮

品川み在壇内石に覆あつ一名盤井

の神社當社より鈴石と云ふ者二尺五寸有て

色青赤

一化の瓦成り是伐うち木の音波の如く

吾妻紀行道

りすく小それれの聲の裏からして入る處と

拂

を此石拂されひ石の中をの声頭（こめ）に立たる所と

黒辰（くろとら）と鳥石（とりいし）と云ふと鷹石（たかいし）と云ふと云ふ
うち一社北の西南隅にあり折高往々冲の鳥居と云ふ
五七所冲中にありと是廻倉在岡よりすくすく
此處より廻内より廻犠禁制の處なり此場と陰
網引（あひ）にて漁人甚多くひあひ本よども是成なるたゞ
詫（わざ）一ヶ所小ゆゑと云ふ石の花表の冲本ありひ古の
事（じごと）柱の木殘り實永の地震に折れたる
そのうちの中に之れと云ふと武藏（むさし）木曾島の神社の
木曾島（きそじま）と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
の社を祀りと云ふ盤井の神社の神名假小姓（おほ
當社の続りと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
當社の続りと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

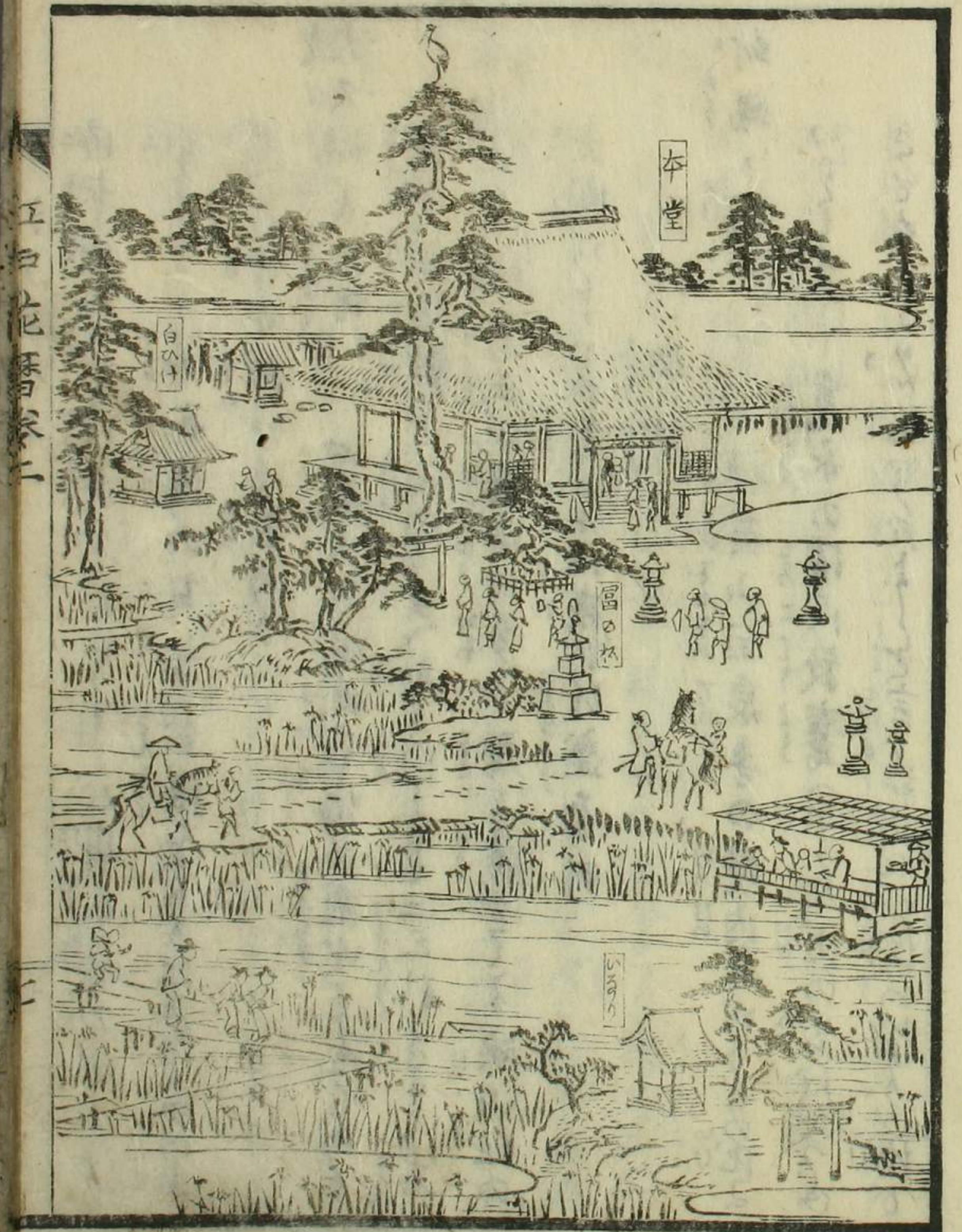
洪武行狀卷之二

十一

荒蕪り寄りとひよりの木原山すれすれ
此山背の往きには相別街道すりある處竊陽すらと
うとうひづれり木原園惣とひより入内くはせとひづれ

○一
國

白波の荒薙の盛の城別ねやくぬ色の人そばれ見る 源家長朝臣
○ 鷺躡 きりゆみ さつき
塗井植木屋 こまきや
鶴込廻りのまた傳中松平印別侯の別館 えもまちたつうかくとうもんじやうべつかん
の脇とたゞへ曲りゆき數軒の植木屋ある まきゆく そくらん うきや
丸彌斎社地 まるやまとざいしゃぢ
上野浅山内池のほとりの門あり草の石 うわのこえのまのいはし
席の邊にけり此神靈驗ひらかし 信仰の葦多 いのくわとも
頬にのひ神前より處の白羽の矢取めりとうふ家 ほのくわ や
頬成就の時返し 納めまこと納むと納むらむれ
とおどく ひこ
あまんよすゆる とおどく
あまん
ひこ



大根
兵中

ま奉納りし道具紙掛りび唐木唐石成りて
製しむる最和漢の古筆入金銀をちりほめたるゆ
道具す小稀だらふあり

大久保百人町

四谷大久保武家地の園中を廻てあり
就中廻廊敷を止のりて歩る門よりニ三到よりへ右
のうへ飯島氏の園中に至り殊よ携生てる映山紅の
大樹りとくの花八十八夜の比盛有利

○郭公

新鷗々池

高田禪英山宝泉寺の境内みだりと花よ
いりも青一寛永の頃ま放鷹の所と化の名ひたうえ
さきをあらわめりによと言上せし以後ひりりと花と

トの屋とよ釣余あじとすりは寺毘沙門堂の小高れ
山のうへ新樹室代ゆほひて涼しくてめぐらの森よ
岡鳥鳴初音の里

幸徳行の辺

小石川向山御殿の四花のあらう摘要町く
かゑりゆきり此辺もつまをやへとすと呼をやまとり
芝切通のうへすり増上寺の梢を紫さん

駿河臺

あらうきはと夏途の鳥とりと蜀王杜宇の古事記
名はと四家の田長又荷平鳥とも異名とらず華陽
風俗録にひそり杜鵑大きき鶴のう羽黒しきの声

寝て血を喰ふ人云春に至り其物多殘肉となり雖
別の苦ありことをせずと云ひ唯田翁その所を候る
農事を題と田長の名られみより疾ある況小丸諸鳥
皆ニ指只杜鵑のみ四指ありその樹上に宿す時々
二指のあにひし二指後小向の四手の田長は是とあり
名はくあひひ口を成りて死即とありの如也と云
山鳥指もくに請きるまゝ三指只杜鵑のみ四指とされ
ちもさる四指すゝまゝ三指後小一指あり郭公へ
あもニ指後もニ指なりやあやの形する鳥杜鵑小
さくさくの金ありむらうとせらへまし

○牡丹

木下川藥師別當庭中
藥王院とりの正室の龜毛川とりくと北条氏康武
藏野紀行に天文十五年仲秋の日もく歸をスルと
あひどく月廿日ひだらめひづけられんとあまくうちばき
中畠葛の法淨奥寺の長老年八十にせよるうじひよ
りそく通寺門ふ立とすと一宿したゞりひづけられん川
をそそぐるのすよ行て一宿するに夜よ風ひゆうに吹く
松風入琴とりひくとおひひくと
ちう風のうきよひくとおひくとあくとあまくとくと
富岡八幡宮 深川より大榮山永代寺金剛神院あ
園中牡丹草の花を可愛隣子をうけ渡し奇麗す

神駄 萱神の代源頼政うれを紫む其後ふ葉の家
にうちり是利尊氏へはとひままでより饗食基氏持氏
同上叔翁よ教礼一左田道灌より信んとすり其後
寛永え年の湧長感法印靈夢のすめりて永代鳴よ
宮門を建立あり同八年に功事就を同二十年八月
十五日けやく紫礼せざる慶安四年のこう法勢貫首
にゆかせし官寺となす同年の秋神前すて流瀉馬
をそしむあれ雀ふの法式をとうとせやう年三月廿一日
ちも山角と号して庭をひきに諸人よみを
云琳庭中 尾久の渡をすと戸豪翁の隠士のよ
度中に一株石さん牡丹あり高さ五尺余めくと六尺

四方をもととひのくえ論スリテ、そのうちほんまへ
北澤邑 多摩郡ト高井戸村の左ノ南の方をもとゆ決村の
村長の園中豊うの頃、遊あまきもひてひめをもとゆ
花屋鋪 実つゝ内蔵鳩の園中石昂の花あり

根津權現古社 今の社より東の方坂上に在標の林
太田通灌の持れりといひ傳へ

○社若

三園稻荷社地 開田堤の通り小梅村の田の中にあり
別當三園山真珠院延命寺と号すと神像を

弘法大师の作りて同大师の勧請りうとひく文和年間
ニ井寺の源慶僧都再興と慶長の頃近づき今地より
南のうへためひを後此地に移りて當社よ英一蝶の
書了牛若丸と赤慶半身の額ゆう今内陣は掲

事記

みえ集 牛しぬまあらうの神あまく西とさる

ゆふにらや田代まあらうの神さくへ 其角

豊日雨

社僧云え縁六年の夏ちに早魃をもよ日年六月
廿八日村民りつむすみ神あにひひ請雨の引願を
その日其角も雲霞が氣消ぢて浮ひ一中に白雲とし
人所うちも角に挂雨の聲をもよひて是れか

農民にうへて一かを連ね當社の神おとこみたまう
に感應やありあん其日大雨ならまく小降りされ
其角なづを當社に傳へり

或人の傍に立え集に翌日雨あり又其角連中
とともに船へ帰らるうちに大雨降るとあらずれ
かづへと向ひ一に或人立て云せられ也此統曰ひり
えとて左のらぐた文ひり
史雨降世人感其徳云々

晋其角或年與門人同船而遊隅田川今茲天下早魃
而田面無水門人等望西乞之句晋辞不_レ止故作句須



大鎮

文人墨客是よおず年四月十七日
神影を緋の比季復みよるどりてあり
とひとも諸國の種をうそり桂の名小菴にとせんが
ゆきよと二もんことんと喰はく氣に久しくなり
和中散 梅林 春川の先ず後園毒樹のりと一の池
壯美を極四月のちつとも喫る十月乃

○ 平 苍
庚申冢 莖鴨枝鷄宿へ出る道筋より農家ありひそか桔木
屋小舟
河寄 大師河原より紫桂傍へゆる道筋助農家にあり家
久元

洪武廿二年

一
十一

よしとくに一丁余がまくは根をまくす本がれい若のじゆく
くわん
寒ふ雪おほきむるうご

一〇

長榮山本門寺　地とあり本堂たのゝくみ檜の大樹あり
また中まかぬる石階に登るにその向へ瀬紛々として
當寺の日蓮上人入寂理葬の比より齒骨の身延山不
をもむとひづき什物より祖師直筆の自註ありやれ
いはゆる法華義理其外自書多し

水雞

本山本門寺　池とあり本堂たのゝみ槁の大樹あり
また木あらぬ石階級登るにその向へ瀆紛々
當寺の日蓮上人へ寂理菴の比より齒骨へ身延山
をもゆりとひきも什物より祖師直筆の自註を
之種ある法義經其外自書多し
祖師堂　長榮山　本門寺　此の額本阿弥光曉の筆す

標茅原 玉姫稻荷の辻えすらわ此社こしゃ山塚やまづか山の辻いはた
をうつあおなり王子村おうじむら稻荷いのりと神縁じんえんありと云傳うわづ
は古いき娘むすめいそりとつとも故ゆゑり。正慶二年まさけいにねん新田義貞しんでんよしつね
朝臣あくぶん藤倉とうくらの高時たかときを追討おひとう弘法大師こうぼうだいし直筆じっぴ
の像ぞうを襟掛あおりにあゆひ。成瀬鷗せいせいおうの玉峰ぎょくほうからかく當あ
所ところにゆきあゆきあり。船ふねをうるあうるあよりとくす人ひとあるは
佃島つくでしまさほきのうち舟ふねをうるあうるありとくす人ひと
雨あのよくぬる時節ときせつかれいとくわる風ふう
○合歎ごくせん木き
花又村はなまたむらの川筋かわすじ小菅こくわ御殿ごてん北きたの條じょうの辻いはたは下しも
かやくすり今いまのちやくとに下しも又大高寺おおだかじ前戸田屋まへとだや

○合歎未



別業東のうこ藩外まと本所押島妙見の土居多
道橋土居とあら所にありといふもたれ往來みて
一見するのみなれりやに奉る

○蟹

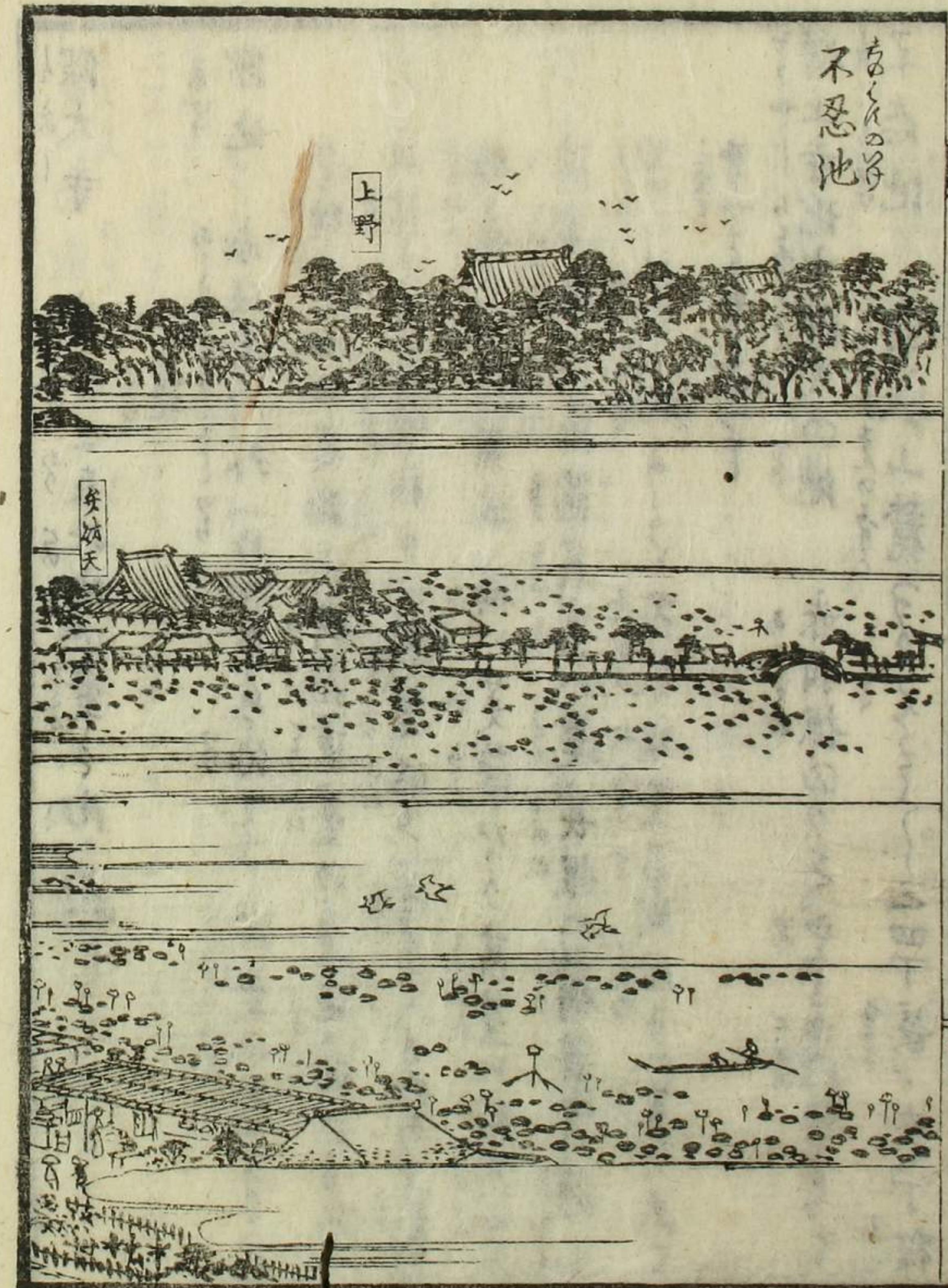
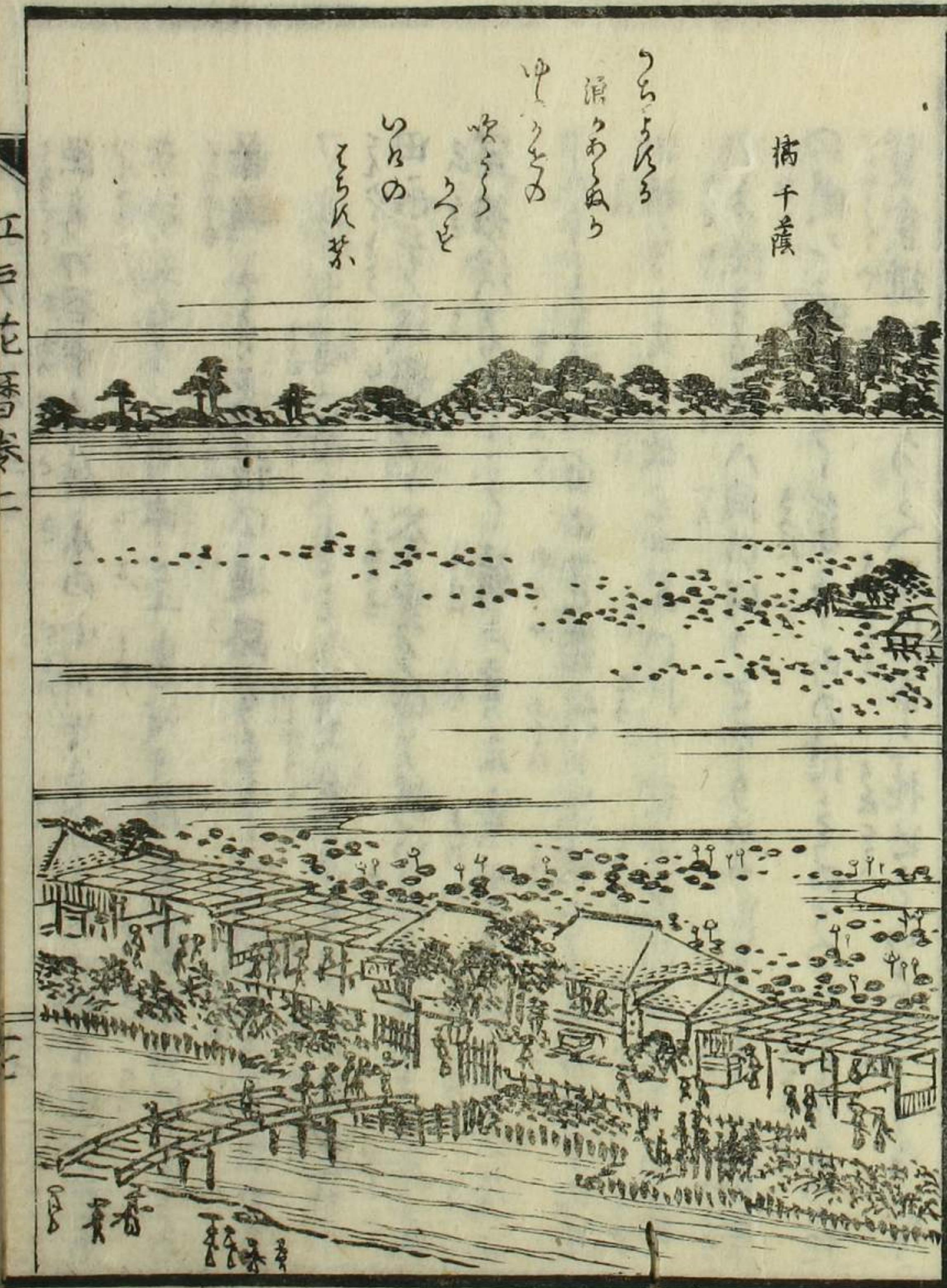
蟹澤 蟹川とも云 谷中ニ崎家林寺のゆきり作のとく
生れきえと甚く形もちひり
蟹見の橋 橋の橋とも云 蟹合をくと橋より三丁五丁
川上の上水川と雜山谷の細流との間すりこみ川の上
とて修業一枚岩と謂ふ水中に大巖あり
王子下通モ 王子より松名坂本へ至る赤鳥山のかどり
戸川の邊 小日向就慶橋の川をも

大根

深大寺

○蓮

溜池 赤坂御門外一せんをくわ池をもと花葉水面をあらむ
ア夥々格物叢詒よ荷花重臺のうの雙頭のりは
次第とも又曉朝日に紀夜低く多く入りのあり是を
睡蓮と云ひ爾雅荷い芙蓉なり其莖い茄其葉い
荷其花い菡萏其實い蓮其根い藕其中い菂丸
莖木の中一物より花紫根莖五尺用る莖ときて
来一ととととらる
増上寺北中辨天の池 赤羽根のうくやく門のうちこ
不忍池 東嶽山麓うり石をもと三四丈長ナ五七丁程



漁舟の谷中を駆本の小川とすがれのはる中へ小
矢欲天ありに別休生島飛うほを寛永の以てまく
離嶋より衆詣の通路なりアリヒテ今ハ至後あり
アキイも鳴の向りとくろの貨食屋がりと名物運び
田一束多代齋萬く蒼翠アの丁度の船あたたかう舟
尾花代スルンとくら居す矣シ小東雲のひの匂ひ殊
クルシテ又紅白の茎花終日に映す。光景などん
に物ナリ又文政三年の以て察此北の岸至り西南
の方陸より幅八間のけりをありめぐらしその先よ八間半
の堤を輪のとく葉そらのばらのうみ葉底立つて
貨食舗軒をすくね櫻桜と植えりと緑くすれり

不忠池とぞ上野を多シ因といふぞこれに對して乃
名する所一四國雜記云

霧のうち行づれ小々所めどり多ひのまへばもひほ 道與准后
風土記云藤輪津池貢鯉鮒鰐鷺鴨鶴鶩鷺鴨等周衝
十里許程旱日水不涸霧雨不爲害祈旱雨入詣于茲所

祭瀬織津比咩也とぞ

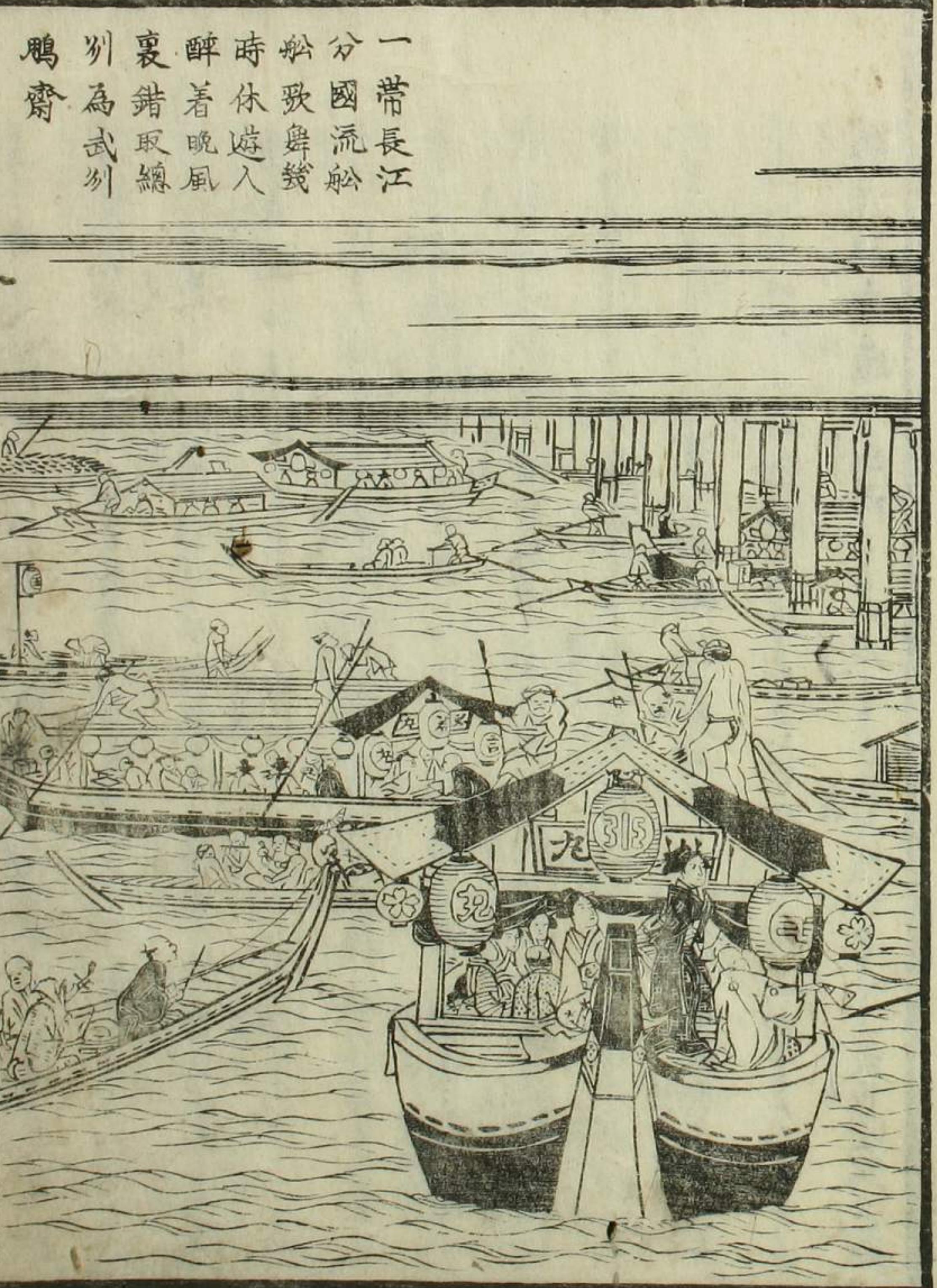
園みづの蓮苦とひめを繫ちふうそめのたへるあ
苦と茎のゆとどくとよれた茶代濃く葉一葉たら
すく代能やとみをのゆの中へほきに
はれひをみるを双方よりとひひく絞よせとくすりみる
むとひ園のとくさうめにわ盆置て花ひう幾重も

かうのりたまひの漏もとすとすと別れ
葉紙簾はくせんれんへき花のひらか葉紙をと
完まんそくと雲くものさむき匂におひ清きよくとまくと
精神じしんを娘むすめふ

○納涼

西園橋にしえんばし 納涼避暑なりょうひしよの地じあくとともの西園川を
りく東都牙とうとが一いとを川幅百三十間余水清すいきよくく
流りゆすすくりあく東ひがま龍波青りゆうはせい翠すい不ふ二向ふたむき
すり右ひだり永代尾えいたお川にほれにだらう行乳山陽田漫ゆきも
遍まんよまく松の東西とうざいを元町廣小路と呼よく五月
廿八日よの夜よせむれ船ふねをひく松船まつねもあれより

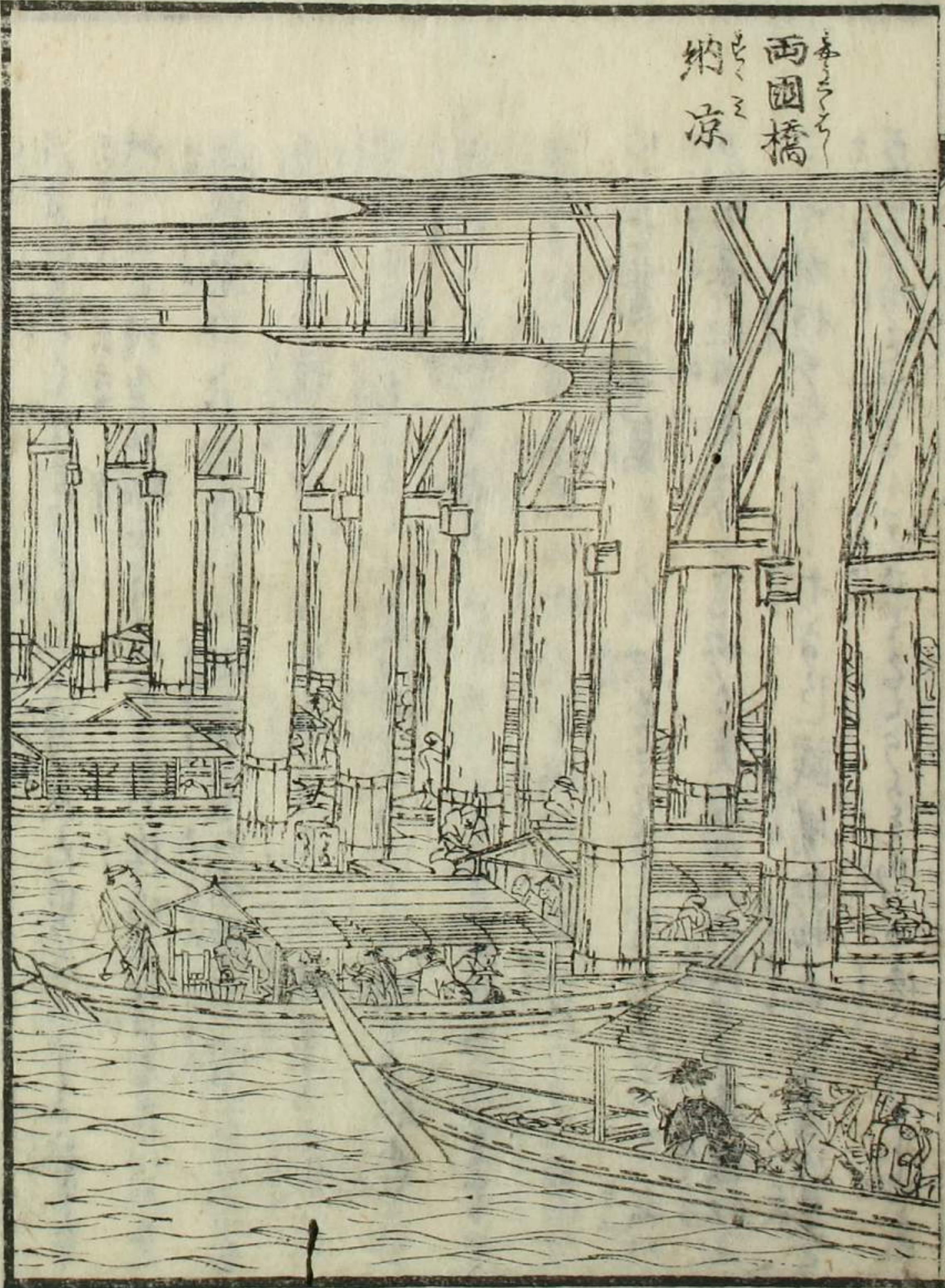
江戸に多くなまく初夏暑さわ氣きあひんとする葦しの草くさ
此川上じゆと川下しもみ船ふねをうへあひの橋はしの下したに因いんとまくとたれ
船ふね火ひ擊うたうる船ふねくに遊ゆ舟ふねと二味線にみせん小唄こゑとそりを
まくうう櫓やぐら船ふねみく爾まことにを催さな玉屋健屋たまやけんやの花上はな室むろ
室むろ紙はらを半はん身み壯觀さうくわんりふへくわらべ酒さけうふ船ふね肴さかな
船ふね幕まくうふ船ふねを酒肴さかなのそだらんとサリの船ふねのひまをと
備そなあたたかと風流ふうりゅうの花はなある隅田川すみだがわの上うおりとてゆふと
のれせ蒲草築かくたぬ吹ふきととくもあく成なり
基きお茶おちゃに日ひと暮くとむらう文政四年文政四年の比ひうち屋根やね船ふねよ
う物もの何なれとちうち打うちうし戯場ぎじょうの物もの似おなじとひに星ほしと
花はな芝しば昇あがとまくうタ幕たまくとまくう出でり停とり止まま



一帶長江
一分國流船
時休遊入
裏醉着晚風
別錯取總
鵝齋
別為武列

大
兵
中
領

西國橋
納涼



あつまひ妻棺のうちのやまと鰻喫の蒲焼を第高くゆ
目標のやんとすばとわすらうく家屋のゆくはりあり
けふり是も一二道にゆく止ぬと安永天明のほん大棺の
先中例の涼とくらむこと與つてとくらむ船もりゆづる
大きうりあつて高尾丸川一丸吉野丸神田丸とよびて
まちうる大樓船あつてとくらむ社右慶長の
頃夏の日ぬき暑をうそとめの爲人納涼の爲ひた船小舟など
作とくらむ是紙備ては草軒を寄りうる是船狂へ
のうめがなと昔の物語によく云國書よ云昭和二年
安政二四年の間船持ひたえとせん万治よりまことに
被流石を造り出あらうれん人まこと見残わまこと夏月のあつま

陵に因灾後の人々の艱苦を忘るよ
もやゝ人々の船のちひきとくとひやりけ
船もひきに大きばりと七八間の樓船を造り候
ゆきの舟と川一丸、戸東丸、山一丸、大國丸、市丸など
はももく山一丸と八九間、船一丸と十間、竹里市丸、十一間
あれ等より重役教十人、幕辨當番、美代、ほせり
云々と慶長の頃、納漁船の權、裏質素を定め
あか原
上野黒門前
廣小路の中通り左町、夕暮より茶店
並木床札を居あわすとおり、商人にあらま
ありまむ
ゆき川風かくといとも涼風きこゆうす

○荒和祓

名越祓

真寄祓荷大明神　名越と其威武の畧にて火刻
金と後より公事根元節折の式に晦日の夜は
續物すかくあくよみくよの使聚束云々是ちよから
日祓の具ひと荒節祓節の祓とりて畧にて
荒節の祓とづくよとある人物傍りにたてて祓請社小
行つとりてもろの祓と佃よりて諸人祓集と當社を
千葉以常亂石濱塚内の守護神すりとづく常亂魁
先陣の願書内陣にあをせたけの小祓願あす
よつて先陣の高名殺度ふせよと祓小真先の
神事りとぞ神木の大祓あくと此木行きもすあると

リテされ神意よそゆりとよつて社造立のよぶ
社のゆに置るやまと洋殿の軒下横すりふ
文化年間此社のうろの方よも老翁のりつことひ
升そよく油揚をとほとらぢよかりとくと喉へ
きよそれと修せひ縁まつてま縁のひがくといひ
頬をの厚みへく羣衆衆もあらむとて諸願叶

セイナホ

大領

江戸遊覽花曆卷之二終

